

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか : 抗妖術施術の分析を通じて

浜本, 満

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 教授 : 文化人類学

<https://doi.org/10.15017/25348>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 14, pp.75-96, 2012-03-26. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン :

権利関係 :

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：

抗妖術施術の分析を通じて

浜 本 満

序 論

ある観念が「信じられている」とは、その観念が生活実践上踏まえておくべき事柄として、実践システムのなかに組み込まれているという事態を言い換えたものだといえる。私が30年近く付き合ってきた地域の人々は、この意味において妖術や妖術使いを「信じている」人々である。つまりそれらの存在を社会生活を脅かす可能な危険として常に念頭に置き、それらの存在を日々考慮に入れつつ生活を営んでいる人々である。そうした人々に出会うと、私たちはしばしば、なぜこれらの人々はそうした信念をもっているのだろう、なぜ妖術とそれを取り巻くさまざまな事柄を信じているのだろうと問いたくなる。素朴ではあるが、もっともな問いである。ただしそれは正しい形で、正しい手順で問われなければならない。ともすれば私たちはこの問いを、そうした信念が流通していない自分たちが暮らしている社会空間を起点にして、そこでどのようなことがあれば、あるいはどのような要因を足したり引いたりすれば、人々にとってそれらが信じるものになるだろうか、その社会空間が妖術が現実的な可能性であるような社会空間に変わるだろうか、という形で立ててしまう。その信念をもっていない状態をデフォルトとして、その人がどのようにして、どのような条件下でそうした信念をもつようになるだろうか、という問いの立て方である。しかし、これは問題を却って困難にしてしまう。信念ゼロ状態を出発点にすべきではないのである。

妖術の効力とそれを行使する妖術使いの存在がともに現実的な可能性であるような場所から出発する必要がある。それらの存在を前提とせねばならないとき、そこではどのような行動戦略が意味ある戦略となり、出来事はどんなふうに移りていくかを問い、そこに生じるだろうさまざまな実践の連鎖や社会的プロセスのアウトカムを評価し、出発点となった信念の流通状態に対してそれがどのような形でフィードしていくかを考察する。つまり、すでにそれらの信念がもたれているという状態から出発して、そこで生じている社会的なプロセスを考察し、それによって出発点とした信念状態の成り立ちを明らかにするという手順である。おそらく、ある種の信念が長期にわたって流通し続けている社会空間においては、そこにおけるこうしたプロセスとそのアウトカムが、たえず当初の信念流通状態を支えるような方向で作動しているといったことが示せるだろう。

相手に気づかれることなく致命的な攻撃を加えるための、通常の人々にはアクセス困難なさまざまな手段があり、そうした手段についての知識をもち、それらを駆使することができる人間が、近

隣や身内の内部に何食わぬ顔をして潜んでいて理由なき攻撃の機会をうかがっているという事実、あるいはそうした人間が身近にいるかもしれないという可能性を、いつも勘定に入れて生きていかねばならないとすれば、ずいぶん鬱陶しい話である。そうしたことに思い悩まずに済んでいる私たちにも容易に想像がつく。さらに、こうした攻撃に対して犠牲者側では何も手が打てず、攻撃者が誰かも確定する方法がなく、まったくなすべがないのだとすれば、とてもやっつけられないということになるだろう。人との交わりを絶って独り山にでも籠もってしまうことが、人がとりうる最善の策——これも一種の対処法ではあるのだが——だということにでもなれば、社会がそもそも成立しない。逆に言うと、そのような信念群は社会空間では生きながらえることはできまい。というわけで、いかにご都合主義的に見えようとも、妖術的攻撃の観念が肥大し、多様で、強力であるところでは、それに見合っただけの対処法も用意されているものなのだ。妖術の観念が特定の社会空間で生き残るには、それに対する対処、抗妖術の諸手段の観念が同じく現実的な可能性として流通している必要があるということになる。両者は相互補強的な関係にある。

調査地域における妖術への対処は、大雑把に要約すれば以下のとおりである。人々が、自分が陥っている苦境や被っている災厄に何か尋常でないものを感じた場合、彼らは占いを通じてその正体をつかもうとする。そしてそこに妖術使いの攻撃が介入している可能性があるとなると、さまざまな対処策が講じられることになる。妖術使いの正体を確認し、告発するという策もあるが、それはたいてい最後の手段である。告発はそれに伴うコストもリスクも大きい。最初に試みるのは、とりあえず現在加えられている攻撃に対処することによって、当面の苦難を取り除くことである。これが「治療 (ku-lagula)」である。もちろん同時に妖術使いの正体を知ろうという試みもなされ、誰が敵であるかの見当はつく場合もある。あいつに決まっていると、当事者たちがほとんど確信しているような場合もある。しかしそれが100%正しい保証はない。妖術使いと思われる人物に対する直接の働きかけは、この段階ではまずなされない。治療にもかかわらず、災厄が反復したり、形を変えて頻発したりすれば、妖術使いが諦めずに手を変え品を変えて攻撃している可能性がある。治療と攻撃のいたちごっこで、いくら治療してもきりがない。そんな場合には、もしお金に余裕があるなら、単なる治療だけでなく、今後の攻撃にそなえた「防御施術」を施してもらうことになるかもしれない。攻撃が、実際に死者を出すまでに至ると、いよいよ「告発」が視野に入ってくる。告発するにはクリアすべきいくつもの条件があり、告発したくてもできない場合もある。下手人について確信していながら告発に至れなかった者は、ひそかに「報復施術」というやや問題のある手段に訴えるかもしれない。資金に余裕があれば、妖術使いを見分けることができると評判の施術師を雇って、人々の前で妖術使いの正体を暴くという近道に訴える道もある。しかし多くの場合は、正体暴露や告発までに至らぬまま、自分たちに攻撃を繰り返し、さまざまな危害を及ぼした妖術使いについての疑念と怨恨だけが肥大していく。溜まりに溜まった疑念や恨みは、何年かに一度流行する地域をあげての「妖術使い狩り」や、そう頻繁ではないが皆無とは言えない、被疑者に対する直接暴力のなかで部分的には解消されるかもしれない。

本論考では、妖術によって引き起こされたと考えられた災厄や、それを引き起こしている妖術使

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

いの攻撃に対して対処するこれら一連の実践のなかでも、その最初のステップに属する「治療」について考察する。

妖術の治療：クブエンドウラ (kuphendula)

はじめに

妖術のあるものは、それが壊滅的な結果をもたらす前であれば、その攻撃を無効にし、それが引き起こした災いを解消するための治療が可能である。妖術の種類に応じてさまざまな治療 (malaguli) の仕方がある。治療のためには、妖術使いの正体は必ずしもわかっている必要はない。妖術の中でもその種類が最も多いムハツソを使用する妖術については、その多くは、クブエンドウラ (kuphendula) と呼ばれる治療で対処できる。クブエンドウラという言葉は「裏返す」「向きを反対にする」といった意味の動詞 ku-phendula から来ている。

クブエンドウラはムハツソを用いた施術である。施術の都度、何のムハツソを用いているのかをたずねたが、施術師たちの答えは基本的には、妖術使いが妖術をかける際に用いるものと同じムハツソを用いるのだというものだった。フルモヨの治療には、フルモヨをかける際に用いるムハツソを、テゴの治療にはやはりテゴのムハツソを用いるのだという。私は漠然と治療に用いるムハツソは、敵の用いたムハツソの力をいわば「中和する」ような治療専用のムハツソであるに違いないと予想していたので、この答えは意外であった。毒をもって毒を制するの類なのだろうかと考えたこともあった。しかし施術の詳細を子細に記録し、検討するうちに、それがまったく別の発想の上に成立している治療であることがわかった。しかし答えを提示する前に、クブエンドウラ施術についてももう少し詳しく解説しておきたい。

フルモヨのクブエンドウラ

人が被っている災厄の性格を明らかにし、それに対処するための方法を指示するのは占い師の役目であるが、多くの場合、占い師に指示された施術を行うのは、占い師とは別の施術師である。占いによって諮問者が抱えている問題が明らかになり、対処方法が示された後、占いは実際に施術を行う施術師の決定で締めくくられる。諮問者は施術を依頼する可能性のある複数の施術師候補をたて、候補の人数分の細い小枝を用意する。一本一本の小枝が諮問者が念頭に置いている特定の施術師を表している。この段階では候補者たちの名前は明かされていない。占い師は、小枝の一本一本の匂いを嗅ぐような動作を繰り返し、頷いたり首を横に振ったりしながら、一本を選び出す。それが治療に当たる施術師となる。

治療を受ける患者——問題を抱えている患者本人以外の者が占いを諮問するのが普通である——は、占いの結果をもって選出された施術師のもとを訪れ、施術を依頼する。大規模な施術の場合、あるいは患者の屋敷で行わねばならない施術の場合は、日を打ち合わせるだけで終わることもあるが、クブエンドウラ程度の施術であれば、その場ですぐに行われることも多い。施術にどのような

品物が必要かも占いで前もって指示されているので、この時点で施術に必要な品物（キリヤンゴナ chiryangona）がすでに揃っているのが普通だからである。品物に不足があったり、施術師自身の流儀で別の品物を必要としたりする場合は、患者たちは施術師の屋敷に数日（一泊程度で済むのが普通だが）滞在して、準備が整うのを待って施術に取り掛かる。しばしば患者は遠方から訪問しているからである。

以下では、クブエンドウラ施術がどのように行われているかを、フュラモヨ（「心を曲げる」妖術であり、その効果は私たち風に言えば精神的な症状として顕れることが多い）に対するクブエンドウラ施術の具体例を使って紹介しよう。

患者は20代前半の女性で、母親に伴われてやってきた。施術師はフュラモヨの施術師として地域では有名なキメラ（仮名）氏。患者の家族とは面識はない。この日の施術に先立って母娘は、これも占いの指示通りに、「汚れ」を取り戻すためにムズカに赴いて、ムズカの洞窟内部の細かい塵芥——ムズカからとってきたこれらは単に塵芥（vidudu）ではなく、マフフト（mafufuto、単数形はfufuto）という特別な名前と呼ばれる——を採取してきている。これは奪われた「汚れ」を患者に戻すのに必要である⁽¹⁾。さらに占い師に指定されたとおり、キナンゴの町の常設市場の土（mitsanga）と細かい塵芥（vidudu）、見ず知らずの人の墓の土、分かれ道の土、涸れた川底の土をそれぞれ一つまみずつ取ってきている。占いによると、妖術使いが彼女に妖術をかけるときにこれらの土と塵芥をキリヤンゴナ（chiryangona 施術に必要な品々、媒体）として用いたのだという。また患者は施術に必要な3羽の鶏も用意している。

施術の準備

- (1) キメラの屋敷のはずれに小さな茂みがあり、その中は3メートル四方ほどの空き地になっている。そこが彼の施術場（ndalani）である。キメラは早朝に近くのスッシュへ出かけて、本日の施術に用いる薬液（vuo）に用いる「冷たい木（mihi ya peho）」の範疇に分類される何種類かの植物の葉、施術後患者が朝夕煎じて飲むことになる薬（「煮るミヒ（mihi ya kujita）」）に使う数種類の木の根を集めてきていた。それらの用意をした後、キメラは、ムララ・ヤシの葉を束ねて箒を作り、いくつもの瓢箪や施術に用いるあれこれを彼の施術袋（mukoba）に詰めて施術場に入る。
- (2) 施術場に入ると、丸太の椅子に座り、瓢箪を一つ取り出し、右手に持った瓢箪を左手の掌に繰り返し打ちつけながら、唱えごと（makokoteri）を始める。この瓢箪の中にはフュラモヨのためのムハツが入っている。施術にはあと二つ瓢箪が用いられる。一つは人頭を模した栓をした瓢箪で、中身はここで唱えごとをしている瓢箪の中身と同じである。もう一つの瓢箪は「開口部を閉じる（kufinywa）」ための瓢箪で、施術後の患者がフュラモヨにかかることを予防するための処置に用いるムハツが入っているという。

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

「サラマ、サラミーニ。お前、奴隷 (mutumwa) よ、使役される者 (utumikaye) よ。お前は捕まえる (gbwira) と言われれば捕まえる (ukagbwira)。お前は放せ (richa) と言われれば放す (ukaricha)。さて、私はお前奴隷に話す。昼に夜に使役される者よ。さて、さて、お前よ。この女性がかげられたのが、はたして象のフュラモヨ (fyulamoyo ra nzovu) なのか、私は知らない。彼女が道端のフュラモヨ (fyulamoyo ra njirani) をかけられたのか、私は知らない。彼女が自己嫌悪のフュラモヨ (fyulamoyo dzimene) をかけられたのか、私は知らない。彼女が憎悪のフュラモヨ (fyulamoyo ra chimene) をかけられたのか、私は知らない。背骨曲がりのフュラモヨ (fyulamoyo ra pinda mongo) なのか、私は知らない。狂気のフュラモヨ (fyulamoyo mbayumbayu) なのか、私は知らない。自己嫌悪 (dzimene) よ、狂気 (mbayuka) よ。さて、私はお前ムヒに告げる。ムヒよ、奴隷よ、使役される者よ。私はお前を盗みはしなかった。私はマンガレ・ンゴメからお前を買った。私はルワンドウ・バヤからお前を買った。さらにズマ・ンゴメからお前を買った。さらにカニヨンゲ・ベカンガ・ムンガからお前を買った。お前、奴隷よ、使役される者よ。捕まえると言われれば、おまえは捕まえる。放せと言われれば、お前は放す。お前には父親はいない。私こそがお前の父親だ。お前には母親はいない。私こそがお前の母親だ。子供は父親に言いつけられると、言うことをきく。子供は母親に言いつけられると、言うことをきく。昼に母親に用事を命じられると従う。夜に用事を命じられると従う。昼にも、夜にも言うことをきく。サラマ。お前は昼に夜に使役される奴隷たれ。さてこれから私はフュラモヨの罫をかける (nahega fyulamoyo)。フュラモヨ、憎悪、自己嫌悪。私はサイのフュラモヨを治療する。ゾウのフュラモヨも治療する。ハイエナのフュラモヨも、ヒヒのフュラモヨも。そのフュラモヨをかけた者 (yeriloga) が男であるのか、私は知らない。女であるのか、私は知らない。そして今、私はお前、ムヒに命じる。奴隷よ、昼に夜に使役される者よ。昼に夜に揺り動け。プツ (唾液を吐きかける)。」

- (3) このとき、患者の女性が近づいてきたので、キメラは唱えごとを中断して、彼女に呼び掛ける。

キメラ (以下C): 急いでこっちにおいで。こっちに来て私にお前のおいしい名前を教えておくれ。私は人の名前が大好きなんだよ (冗談)。お前の名前は?

患者 (以下P): ツイククよ。

C: 誰さんのツイククなんだい? ⁽²⁾

P: サリムのよ。

C: ツイクク・ワ・サリムだね。けっこう、けっこう。

P: もう行っていい?

C: 行っていいよ。あ、ちょっと待って。詳しく教えておくれ。私がきちんと理解するように。お前、お前の病気はどんな病気?

P：私の病気は、占いにいったらフュラモヨだと言われたわ。

C：フュラモヨ。夫とうまくいってないのかい？

P：うまくいかないの。この人こそと思っていっしょになっても、ああ、この人じゃない。

C：え？まだ結婚してないのかい、あんた？

P：嫁いだわ。そしてその嫁いでいった先こそ、私をこんな目にあわせたところなのよ。

C：じゃあ、そこから出てきちゃったんだね。

P：実家に帰らされたのよ。実家で出産しなさいと言われたの。「子供が産まれたら、また迎えにきてあげよう」って。私は子供を産んで、待ったわ。で、もうその子も小学校1年生。というわけで先日占いに行って、おまえは嫁ぎ先でフュラモヨにかけられたんだって言われたのよ。(妖術使いは)知らない人の墓の土と、市場の塵芥と、分かれ道の土を取ってきて、それを一緒にして、(それを媒体にして)私に妖術をかけたんだって。私が一箇所に落ち着かないように。私が付き合おうとする(私がつかむ)どの男も、長続きしないようにって。奴らはそんな妖術を私にかけた。この人こそと思って、ああ、この人じゃない。今、ある男性といっしょになって4年目なんだけど、それを見てあっちの奴ら(妖術使いたち)は、さらに攻撃の力を強めた。

C：お前たちが別れてしまうように。奴は、きっとツァムラの妖術も混ぜているよ。

P：(現在の相手も)家に私がいるのを見ると、もう心が曲げられてしまっ、すぐにどこかに行ってしまうのよ。

C：よしよし、私がお前を治療して、おまえを娶ってやろう(冗談)。

P：治療して治してくれるだけで十分。

C：いやいや、治療して結婚してあげよう。どうしてお前、嫌がるんだい(冗談)？

P：もう行っていい？

C：さ、行った、行った。あ、市場からとってきた塵芥、ムズカから持ち帰った塵芥、川床から持ち帰った土、分かれ道の土、墓場から持ち帰った土を持ってくるように、家内に言っておくれ。全部家の中に置いてあるよ。

(4) 女性が立ち去ったので、キメラは唱えごとに戻る。

「さてさて、ツイククは打たれた(wabandwa)。妖術で打たれた。本人も気がつかないままに。彼女は世界の中で落ち着くところがない。宇宙の中で落ち着くところがない。大地の上で落ち着くところがない。どこにいても、ああ、(私の居場所は)ここじゃない(agbwirapho tsipho. 字義通りには「彼女がつかむところの場所は、その場所ではない」)。ツァムラとフュラモヨを付けられた。フュラモヨは屋敷では拾われない。それは道端で拾われる。彼女も(男たちに)道端で(行きずりに)拾われるだけ。

さて、今日、私は次のように命じる。彼女を放してやれ(umurichire)と。私はお前、ムヒに

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

対して命じる。お前、奴隷よ、ムンボ (muyumbo) よ、全世界を揺り動かす者 (uyumbisaye) よ。サラマ、サラミーニ。プツ (唾液を吐きかける) 」

- (5) 唱えごとが終わると、その瓢箪のなかの黒い粉を掌に取り、それを用いて地面に人の形をした図形を描く。この図形は「毘 (muhambo)」と呼ばれる。続いて黒い線にそって、ココナツの核を半分に割った容器 (chivo) に入れて持ってきたトウモロコシ粉で、白い線を書き加える。図が完成すると、図の頭にあたる方向に、「開口部を閉じる (kufinywa)」ための瓢箪を置き、図の足の方向に、人頭をかたどった栓をしたフエラモヨのムハツソの瓢箪を置く。最後に、赤い布で縛ったムヒの束を図の中ほどに置いて「毘」の完成である。

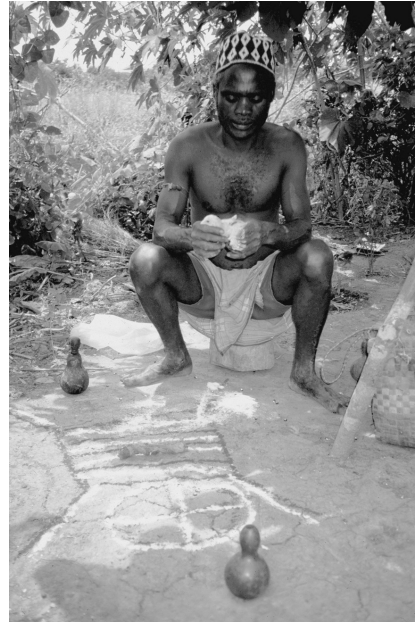


図 1

(キメラ氏の施術場の地面に描かれた人がたの「毘」。手には「逆毛の鶏」を持っている。)

- (6) 続いて、用意してあった「冷たい木」をバケツの水の中に入れ、細かく揉みつぶしながら薬液 (vuo) を作る。瓢箪の中身のムハツソを加える。上で注文した5種類の土や屑を混ぜたもの (小さい紙の袋に入れてある) が届き、それも薬液に加えられる。完成した薬液に対して唱えごと。

「ビスミラーヒ。お前、レザ (reza) よ、昼に夜に冷やす者 (urezaye) よ。お前マボザ (maphoza) よ、冷ます者 (uphozaye) よ。ウンバ (地名) の妖術もお前は冷ましに行く。ダルニ (以下、タンザニアの地名) の妖術もお前は冷ましに行く。ペンバ (地名) の妖術もお前は冷ましに行く。ムマジニ (地名) の妖術もお前は冷ましに行く。ザラモ (地名) の妖術もお前は冷ましに行く。サラマ、サラミーニ。

ムヒよ、奴隷よ、使役される者よ。お前は捕まえろと言われれば捕まえる。放せと言われれば放す。お前はマボザのムヒ。ツイクク、あの女性は妖術を付けられた (wabandikwa)。彼女はしたらよいかもわからない。今こうして、彼女はムヒに出会えた。だからマボザよ、私はお前に命じる。冷ませ。夜の問題も冷ませ。昼の問題も冷ませ。

ムヒよ、奴隷よ、使役される者よ。捕らえよと言われればお前は捕らえる。放せと言われればお前は放す。今より、お前は使用人。仕事をせよ。冷ます者たれ、マボザよ。火は、昨日、一昨日のこと。火は水と出会う。水の仕事は、消す (冷やす) こと。サラマ、サラミーニ。私はお前を盗んでいない。私はお前をカニヨンゲ・ベコンガ・ムンガから購入した。私はお前をマンガレ・ンゴメから購入した。さらにズマ・ンゴメから購入した。問題 (tabu) と苦

境 (mashaka) ゆえに。そして今日、今、ツイククは問題と苦境にたっている。今、今日、こうして彼女がここにやってきた以上、私は命じる。彼女に振りかかっているすべての問題よ、ここで置き去りになれ。』

(7) キメラ、患者を呼ぶ。患者、彼女の母親とともに施術場に入る。

C：さあ、さあこっちへお出でなさい。ワンピースは脱いで。面倒だね。こんな小娘が着るような服で来たりして。

(施術の際には、ドゥルマの婦人たちの普段の服装、つまり身体の上下を二枚の布で巻いただけの装いが求められる。彼女が着替えに手間取っているのを見て、キメラはさらに性的な冗談を加えるが、ここでは訳出しない。)

P：用意できたわ。

キメラ立ち上がって、患者を自分が座っていた丸太の椅子に座らせ、彼女の頭に左手を置いて、彼女に憑いている憑依霊たちに対する唱えごとを行う。憑依霊持ちの患者の場合、妖術系の治療を始める前に、患者に憑いている憑依霊たちに治療を行う許しを請わねばならない。憑依霊、とりわけイスラム系の霊たちは妖術の黒いムハツを嫌っているので、断りなしにムハツを用いた治療を行うと、怒って患者をひどい病気にしてしまうと言われている。

「タイレニ、タイレニ。こんな時間にお話しすることもなかったでしょう。ムルング(天空の神 mulungu)よ、ムルングに従うペーポ、ムバラワ、ブルシ、マサイの皆さん。サンズア、キロボト、キンガンガ、バニアン of the 皆さん。あなた方こそこの砦(患者の身体のこと)の主です。デナの皆さん、ルキの皆さん、シェラの仲間たち、ディゴの皆さん。あなた方もこの砦の主です。たった一人しか住んでいないような屋敷などないと言うではないですか。さて、こんなふうにお話しするのも、この女性を見舞っている困窮(ugayi)と、問題と苦境のせいです。彼女が試みること、なにもかもがうまくいきません。彼女は道に迷うもの、世界に迷うもの、宇宙に迷うものです。

お邪魔いたします、と申します。というのは主人のいない屋敷はないからです。皆さんが主人です。皆さんにお願いいたします。これより私たちは治療をいたします。どうか、黒いムハツをご覧になったからと言って、驚いて、われわれは妖術をかけられている、などとおっしゃらないでください。

(中略：今度はイスラム系の霊たちに対して、同様な内容をスワヒリ語で語りかける。最後に、次のように唱えて締めくくる。)

というわけで皆さんにお願いいたします。各自、それぞれの居場所に御戻りください。私は

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

今から黒いムハツソを用います。いったいなぜ汚いものがもちこまれるのか、などとおっしゃらないでください。とんでもございません。私たちは何をしようとしているのでしょうか。わたしたちは皆さんの砦をきれいにしようとしているのです。アマニ。」

施術開始

(8) 患者、立ち上がらされ、地面に描かれた「毘」を往復させられる。図の足の方から頭の方へゆっくり毘を踏みながら歩き、今度は図の頭から足の方へと進む。次いで「毘」の上に、脚を図の足の方向に投げ出して腰を下ろす。

(9) キメラは、逆毛の鶏 (kuku wa chidimu) を右手に持ち、左手でその羽をむしりながら、唱えごとを唱えつつ、患者の周りを時計回りに7回周回する。

クブエンドウラ施術のキリヤングナ (chiryangona 施術に必要な品々、媒体) としての逆毛の鶏の重要性は、妖術使いもそれをキリヤングナとして用いていたはずだからだと言われる。妖術使いが用いるキリヤングナは、首吊りによる死を命じた際にはロープといった具合に、同じフュラモヨであってもその都度変化するが、クブエンドウラの際にはそれらと同じキリヤングナを用いる必要があるとされている。逆毛の鶏は、すべてのクブエンドウラ——フュラモヨ以外の場合でも——において必須であり、この点で特別の重要性をもっている。

「ブツ (唾液を吐きかける)。サラマ、サラミーニ。逆毛 (chidimu) の鶏はお前だ。ムバユカ (mbayuka) そのものの逆毛、ンディムロ (ndimulo) そのものの逆毛⁽³⁾。女のンディムロ、男のンディムロ。

さて、ツイククだ。ツイククは妖術を付けられた (wabandikpwa)。果ては、自分がどこにいるのかわからなくなってしまう有様。どこにいても (agbwirapho)、(私の居場所は) ここじゃない。彼女に与えられるのは空気のみ。彼女は空気をつかむのみ (字義通りには「空気だけが彼女がつかむもの (agbwirao)」。でも夫たるべき人を、つかむことができない (kagbwira) である。さて、今、本人が占いに行った。占いに行ったところ、お前にはフュラモヨがあると言われた。自己嫌悪のフュラモヨ、自己嫌悪 (dzimene)。憎悪 (chimene)。憎悪こそフュラモヨそのもの。まさにまさにフュラモヨそのもの。彼女は妖術をかけられてしまった (achilogwa kare)。彼女が屋敷 (mudzi) をなさぬようにと⁽⁴⁾。

さて、お前、フュラモヨよ。お前の仕事はまさにこれ、屋敷をなさせないことだ。お前には屋敷はない。お前の仕事は父親の肛門、母親の肛門について口にすること。お前が口を開けば、女の太鼓の踊り方、踊るのは女。

(唱えごとを中断し、患者に向かって「ごめんよ。この施術は分別のない施術なんだよ。)⁽⁵⁾

さて今、私は彼女に、妖術を解除しようとしている (namutaphula)。彼女が誰の目にもとまらないのは、昨日、一昨日のこと (「過去のこと」の意味)。彼女は凶兆を与えられた。彼女

は頭に火を与えられた。ちょっと急ごうものなら、それだけでもう焼けてしまう。でもそれももう治る。

今日、私は彼女に、人間の「汚れ (nongo)」を与えよう。彼女に「汚れ」を戻してあげよう。ここを去れば、「なんと、あの施術師は本物だったよ、皆さん」と彼女が言うことになるように。彼女は回復することがどんなことか知っている。彼女が回復しますように。涼しい風に吹かれるということを知っている。彼女が涼しい風に吹かれますように。彼女は娶られるということがどういうことか知っている。今すぐにでも娶られますように⁽⁶⁾。」

患者の母が唱和する。

「ただちに娶られますように。」

キメラ、ふざけてそれに応じる。

「じゃあ、まず私に彼女を娶らせておくれ。彼女が言うには、嫌だってさ。でも彼女が私を拒むのは、彼女のフュラモヨのせいだってことは私にはわかっている。だからこうして「冷たい木」で彼女を触ってやれば、もう彼女とは結婚したも同然。これからはいいことばかりだよ。二人で屋敷に仲良く暮らす。小屋だって立派に立ててあげる。屋敷だって。彼女もこれで一人前と評判になるさ。」

唱えごと再開

「さて、今日、私は述べる。このフュラモヨ、こいつを私は取り除く。これからはフュラモヨはない。憑依霊のフュラモヨ、象のフュラモヨ、犀のフュラモヨ、ハイエナのフュラモヨ、イヌのフュラモヨ、ワニのフュラモヨ、コウモリのフュラモヨ。フュラモヨ、自己嫌悪、ムバユムバユ、狂気、ムバユカ。

お前、つむじ風よ。風とともに走り去る者よ。幸運をつかめ。お前の幸運は雲だ。サラマ、サラミーニ。

さて、今日、私はお前、逆毛の鶏に告げる。解き放て (ほどけ) と命じる。この子供を解き放て。彼女を解き放って、人にしてやれ。生計が立つように。たくさんの収入、これこそ私が望むこと。人は歩む者。彼女が、たった一日で100シリング与えられますように。人は歩む者。彼女が2000シリングを手に入れますように。これこそ幸運というもの。

彼女は軽蔑されてきた。彼女は (妖術使いによって) とぐろまく糞便を送りつけられた。彼女の身体が糞便の如くであるようにと。しかし、今日、これから、もはや糞便はない。もし本当にフュラモヨだったのなら。フュラモヨよ、お前には父親はいない。私こそがお前の父親。お前には母親はいない。私こそがお前の母親。お前、奴隷よ、使役される者よ。捕らえろと言われればお前は捕らえる。放せと言われればお前は放す。今私は命じる。彼女を解き放て (ほどけ)。

今日私は、彼女にレザ (reza) の薬液 (「冷やし」の薬液) をかける (字義通りには「打つ

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

(kupiga)」。彼女がここを去れば、彼女は彼女の子供と笑いあう。笑いあうこと、これこそすばらしいこと。彼女が人々から好かれますように。ここを去った後、彼女は娶られることがどういうことか知っている。彼女が娶られますように。

お前、フュラモヨよ。お前の居場所はブッシュだ。ブッシュへ行って、シマウマやエランドを喰らうがよい。お前の居場所は海だ。海へ帰って、オオトカゲやトンボを喰らうがよい。こころゆくまで。でも、彼女を解き放て。」

- (10) 逆毛の鶏の足を握って、その全身をバケツのなかの薬液に浸し、鶏を振って、患者に薬液をかける。再び鶏を液に浸し、唱えごとを唱えながら、今度は頭部から始まって、薬液のついた鶏で撫で回すようにして全身に薬液をつける。

「さあ、今、彼女を放せ (umuriche)。彼女を放せ。この者が(妖術使いに) 屈服したのは、昨日、一昨日のこと。さあ、解き放て(「ほどけ」(uvugule)), 解き放て。お前はほどく者(chivugu), 解き放て、解き放て、解き放て。

この身体のなかより出ていけ。出ていけ。出ていけ。心臓のところから、出ていけ。お前、フュラモヨ、お前は背中(心臓の裏側)に腰をすえていた。フュラモヨは肺に腰をすえていた。ここ、心臓のところまで下りてきて、大きな問題を引き起こした。心は張り裂けた。そうなる彼女には友人もいなくなってしまう。愚か者そのもの。「こんな風に(してほしいのに、誰も)してくれない。こんな風にしてくれない」(と不満ばかり言う)。この「こんな風にしてくれない」も、これからは口にすることはない。解き放て、解き放て、解き放て。彼女が健全な人間になりますように。」

- (11) 患者の背後で逆毛の鶏の首を切り落とし、「明日の朝になれば、もう彼女について私は何も心配することはない。」と言って、患者の背後から患者の頭越しに前方の茂みに向かって、鶏を投げ捨てる。
- (12) 白い鶏(kuku mweruphe)を右手に持ち、唱えごとを唱えつつ左手で羽をむしりながら、反時計回りに6回、患者の周りを回る。白い鶏はクブェンドウラの文脈では「光明(mulangazo)の鶏」と呼ばれ、患者が自分の置かれている状況を見て取り、進むべき方向を知ることを可能にする。

「お前、白い鶏。私にお前と争うつもりがないことは、お前がよく知っている。お前の仕事は照らし出すこと。道をよく見えるようにして、彼女に道を示すこと。今日、今や、この者には揉め事(「争い(kondo)」)はなくなった。今日、今より、私は彼女の目を開かせた。ムズカの問題があるというのなら、私はムズカの問題も解消する。もしムズカの問題があり、彼

女がムズカに（汚れを）置かれてしまったというのなら、私はその負債を払おう。というわけで、この者にはもはや、何の揉め事もない。」

- (13) 白い鶏の足を握って、鶏の全身を薬液に浸し、患者に薬液を振り撒く。再び鶏を薬液に浸し、頭部から始めて全身を撫で回すようにして、患者に薬液を浴びさせる。両手の掌を上にもつけさせ、そこを念入りに撫でる。

「今、私は、この者に力（nguvu）を戻してやる。彼女の顔が美しくあるように。女性の顔になるように。

人は分別によって、尊敬を受ける。人は出産によって尊敬を受ける。人は稼ぎによって尊敬を受ける。人は富によって尊敬を受ける。この者、彼女の分別が不安に苦しんでいたのは、昨日、一昨日のこと。なぜなら彼女は駄目にされていたからだ。今日、この日より、私は彼女の分別が一箇所にまとまったと告げる。分別は、水辺の木陰のように冷えよ。サラマ、サラミーニ。

今日、今、私は彼女の悪い汚れを取り除く。あの汚れを、本当に取り除く。あの汚れはもはやなくなる。彼女が解放され（ほどかれ）ますように。彼女の顔から汚れがすっかり取り除かれるように。」

- (14) 患者に向かい合って、白い鶏を屠殺する。逆毛の鶏の場合とは異なり、首は切り落とさず、身体についたままにする。「毘」の凶形の足の方に置いてある瓢箪の中に、鶏の血を数滴、垂らす。

「さて、しっかり解き放て。私はお前が解き放つことを望む。解き放て。つつがなきことこそ、私が望むこと。」

- (15) 白い鶏の死骸を右手のブッシュに向けて投げ捨てる。

（鶏に向かって）「お前は、二度とここには戻らない。（患者に向かって）お前も、二度とここに来ることはない。」

患者も一言「それこそ私たちが望んでいることよ。」

- (16) 黒い雌鶏（kuku mwiru）を右手に持ち、左手で羽をむしりながら反時計回りに4回、患者の周りを回る。黒い雌鶏は「力の雌鶏（kuku wa nguvu）」とされ、豊饒性や健康を促進するという事になっている。この鶏のみ、逆毛の鶏、白い鶏とは異なり、この施術において殺されず、そのまま患者の屋敷で飼われ、子供をもうけ続けることが期待されている。

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

「さて、黒い雌鶏はお前だ。黒い雌鶏はお前だ。お前の仕事は「力 (nguvu)」を戻すことだけだ。私はこの女性に力を戻してやろう。彼女がつつがなくあるように。今日、今このとき、私は告げる。もはや彼女には何の揉め事（「争い (kondo)」）もないと。揉め事は、昨日、一昨日のこと。今日、私は彼女にレザの薬液（「冷やし」の薬液）をかける。彼女は「ほどける (kuvugukpwa)」とはどういうことか知っている。彼女がほどけますように (navugukpwe)。お前のような黒い雌鶏の良き豊饒性 (chinamasi chidzo) よ。サラマ、サラミーニ。」

- (17) 黒い雌鶏を身体の部分だけ薬液に浸し、鶏の足をもって患者に薬液を振り撒く。鶏が暴れる。

C：こいつ、びっくりしているよ。あの大きなやつら（逆毛の鶏と白い鶏のこと）は、びっくりしなかったのに、こいつは暴れる。お前ときたら、わあ。まあ、そんな風に暴れるがいいよ。

患者の母：娘を解き放て。人間らしくさせてちょうだい。彼女の夫が以前言っていたわ。こいつの「汚れ」はすっかり駄目にされているって。悪い汚れそのものだって。

- (18) 黒い雌鶏の蹴爪を切り取って、血と漿液を容器に受ける。その後、黒い鶏はそのまま患者の母に手渡される。

C：ちょっとこいつ（黒い雌鶏）をしっかり持っててくれるかな。

M：脚をもつの？

C：体全体をしっかりと。血を垂らさせないと。

キメラ、ナイフで黒い雌鶏の蹴爪を切り取る。

C：しっかり持って。血が滴り落ちるのが見えるかな。その血をとって、後で（薬液の）中に入れるのさ。

施術の後始末

- (19) 患者の上半身を裸にし、患者の両手をとって『毘』の上に立ち上がらせる。患者に片足ずつ、宙に強く蹴りださせる。ついで腕を一本ずつ勢いよく宙に振り出させる。薬液を手ですくって、頭部から始めて患者の全身に注ぐ。特に足許に念入りに注ぐ。用意してあったムララ・ヤシの箒を使って、患者の身体じゅうを掃く。
- (20) とってあった黒い雌鶏の蹴爪の切り口からにじみ出た血と漿液を、バケツの薬液に加え、さらに水を加える。その水で患者自身に7回、沐浴するように命じる。茂みのなかで患者が水浴びしている間に、ムリナは地面に描いた「毘」を薬液によって念入りに消し去る。これは

「罨」を冷やすことだとされている。

- (21) 沐浴がすむと、患者は薬液の入っていたバケツに背を向けて、後ろ向きにそれを蹴りとばす。
- (22) 最後に患者の足首、膝、肘に剃刀の刃で浅い切り傷をつけ、そこに「開口部を閉じる (kufinwa)」ための瓢箪の中の黒いムハツンを擦り込む。こうしたムハツンによる処置をクツォザ (kutsodza) という。再度フュラモヨに捕らえられないようにとの予防措置であるとされる。唱えごとはなされず、事務的にさっさと終わられる。

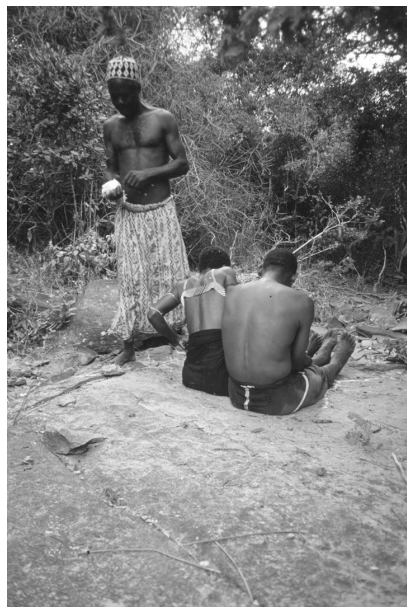


図2

(水の潤れた川床で夫婦にかけられたフュラモヨをクブェンドゥラするキメラ氏。妖術使いがどのような仕方であつて術をかけたと想定されるかに応じて、クブェンドゥラを行う場所も決定される。)

分 析

施術の各段階の作業内容をまとめておこう。

準備段階

- (1) ブッシュでの植物の採集など、材料、道具の準備。
- (2) (4)フュラモヨのムハツンに対する唱えごと
- (3) 患者の女性からの名前や症状などの情報の収集

これは通常は(2)を始める前に前もって入手しておくべき情報である。今回の施術では、唱えごとを中断し、この情報を得たのちに、唱えごとを再開している。

この短い会話の中で、患者が抱えている問題があきらかになっている。彼女は最初の結婚に失敗した後、複数の男性との関係を持ち、どのパートナーとも正式な結婚にいたる安定した関係を築けずにいる。あちこちと居場所を変えてひとつ所に落ち着けない。自分自身のことを嫌いになってしまう。フュラモヨの典型的な症状の一つである。さらに、周囲の人からも嫌われる傾向があるらしい。おそらくこれは彼女の「汚れ」が奪われていることに原因がある。

- (5) フュラモヨのムハツンをつかつての「罨」の描画
- (6) 「冷たい木」を主成分とする薬液つくりと、それに対する呪文
- (7) 患者に憑いている憑依霊に対して施術の許しを請う唱えごと

たまたま患者が憑依霊もちであったため、これはクブェンドゥラの通常の手順には含まれない

メインの施術

- (8) 患者に「罨」を踏ませ、その上に腰を下ろさせる

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

- (9)～(11) 逆毛の鶏による施術
 - (9) 逆毛の鶏による周回と唱えごと
 - (10) 逆毛の鶏による薬液散布と唱えごと
 - (11) 逆毛の鶏の屠殺と投げ捨て
- (12)～(15) 白い鶏による施術
 - (12) 白い鶏による周回と唱えごと
 - (13) 白い鶏による薬液散布と唱えごと
 - (14) (15) 白い鶏の屠殺と投げ捨て
- (16)～(18) 黒い雌鶏による施術
 - (16) 黒い雌鶏による周回と唱えごと
 - (17) 黒い鶏による薬液散布（唱えごとなし）
 - (18) 黒い鶏の蹴爪切除と血の採取（血は後に薬液に加える）

術後処理

- (19) 患者を「畏」から出し、施術師の手から薬液散布
- (20) (21) 薬液による「畏」の消去、患者の沐浴
- (22) 予防措置：「閉じる」ためのムハツによるクツォザ

施術の構成要素

クブェンドウラの施術は、主としてムハツを用いた操作と「冷たい木」による「冷やし(kuphoza)」の操作を組み合わせたものであることがわかる。異なる種類の妖術ごとにクブェンドウラで用いられるムハツは違ってくるが、「冷やし」の部分は治療対象の妖術の種類にかかわらず共通している。薬液の作製、3種の鶏をもちいてのその散布、患者を「畏」から出す際の散布、その後の患者自身による沐浴では、妖術の攻撃を受けてダメージを受けた患者を冷やすことが目的の一つであり、唱えごとのなかでも繰り返し強調されている。「冷やす」という言葉で指される操作が症状の軽減や状態の正常化を目指した操作であろうことは、日本人である私たちにとってもなんとなく推し量れるし、実際そう的外れな理解ではない。この地域では単に「冷やしの施術 (uganga wa kuphoza)」と言えば、性の規範からの逸脱や「事故」——「悪い死」、流血、火事などがそこに含まれる——によってダメージを受けた屋敷の秩序を修復する施術を指しており、そこで用いられるのが「冷たい木」と総称される植物群である（浜本 2001）。妖術の場合にも、妖術使いの攻撃によって患者の健康や生活に加えられた損傷を除去する作用が、同じ「冷たい木」を成分としてもつ薬液に期待されているのである。

もちろん「冷やし」はクブェンドウラの薬液の唯一の目的ではない。薬液には、「冷やし」を担う「冷たい」植物群以外に、ムハツ（この場合はフユラモヨのムハツ）や、妖術をかける際に妖術使いが用いたとキリヤンゴナ (chiryangona 施術に必要な品々、媒体) だと占いが示した墓の土や市場の塵芥なども加えられている。さらに今回の施術では、薬液にはムズカから持ち帰った一つまみ

の塵芥——マフフト (mafufuto) ——も加えられている。患者はフュラモヨの妖術をかけられているだけでなく、「汚れ」を奪う妖術もかけられていると考えられており、薬液の散布は、これに対する治療——「汚れを戻す」こと——も兼ねている。いかにも付け足しのような印象は免れないが、散布の際の唱えごとでも繰り返しこのことは触れられている。

このように薬液散布は、それに加える成分によって同時に複数の目的を果たしうる操作である。「冷やし」はあらゆるクブエンドウラ施術の薬液の——さらにはその他の施術の多くでも——共通要素、不変成分であるが、このことは逆に言えば、特定の妖術に対する処置に直接かかわる部分ではないということも意味する。やや語弊があるかもしれないが、日本で医者にかかる時、訴える症状が風邪であれ、腹痛であれ、腰痛であれ、常に処方されているかのように見える鎮痛剤や胃薬の類に似ている。クブエンドウラで何が起きているのかを理解するためには、やはりムハツソを使って何がなされているかに注目する必要がある。施術がいったん始まってしまうと、三種類の鶏を用いての周回や、薬液の散布といった派手な演出にばかり目が行ってしまい、ムハツソそのものについてはあまり目立たない。しかしムハツソは、この施術全体の当然すぎて強調するまでもない暗黙の背景として、つねにそこにある。地面に描画され、患者がそれを念入りに踏み、その上に座っている「毘」として。

ムハツソと「毘」

施術師がムハツソを使って地面に描く人の形が「毘 (muhambo)」と呼ばれるのはなぜだろうか。妖術使いはムハツソを踏み道——フュラモヨの場合——や、小屋の戸口その他ムハツソに応じてさまざまな場所に仕掛けて、通りかかった犠牲者がムハツソに捕らえられるようにすると考えられており、この行為は「毘をしかける (ku-hega)」という言葉で表現されている。これと施術師の描く「毘」とは関係があるのだろうか。ある施術師は、両者の関係を明快な言葉で説明してくれている。

「そんなふうにお前が毘を仕掛けるとき、いわばお前は妖術使いがどんなふうにかんことを行うかを模倣している (unaigiza dza ye mutsai vyohenda) のだよ。なぜならあいつ (妖術使い) は道端へ行って、(ムハツソ) を指の間から落としながら、「ここを通る者、フュラモヨとともにあれ (narikale)」, 「フュラモヨに捕らえられよ (nagbwirwe)」と言うからだ。そしてお前、施術師も、その妖術使いがそんなふうにするのを真似るのだ (wigize yuyatu mutsai viratu vyoahendavyo)。毘をしかけ、病人を座らせ、その後であの薬液で病人を冷やすわけだ。というわけで施術師によって治療に使われるムハツソは、妖術使いもまさにそれをもっている。ただし、その目的だけが違っているのだ (itsiphokala ni tamana tu ndiro ambaro ri tofauti)。」

施術師が妖術使いと同じことをする、つまりムハツソで毘をしかけて患者にその上を歩かせることの意味はなんだろう。施術師が、毘をしかける際にムハツソに対しておこなう唱えごとを仔細に検討してみよう。

ムハツソに対する唱えごと

施術師ごとに言い回しなどに微妙な違いはあるが、ムハツソに対する唱えごとはかなり型にはまっている。ムハツソに対して「奴隷」と呼びかける冒頭の決まり文句は、施術師以外の多くの人々にもおなじみである。ムハツソは、コマンドによって作動するタイプの薬の一般名であるムヒ (muhi 文字通りには「木」という言葉で呼びかけられる。

「(『ムヒよ』, または『お前』) 奴隷よ, 使役される者よ。お前は捕まえろと言われれば, 捕まえる。放せと言われれば放す。(“muhi u” or “ndiwe”) mutumwa utumikaye. Ukambwa gb'ira, ukagb'ira. Ukambwa richa, ukaricha.)」

この表現は、続く唱えごとの中で何度も繰り返されることになる。

次いで、フュラモヨの種類が列挙される。施術師は妖術使いがムハツソに対してどのような命令を下したか、正確には知らない。それゆえ、施術師がおこなう命令の中では、妖術使いが患者にもたらそうとした特定のフュラモヨの症状のすべての考えうる可能性を列挙する必要があるのだという。

次いで、施術師はムハツソに対して、「盗んで」手に入れたものではないことを明言し、その購入履歴を述べ立てる。すでにムヒの観念を紹介した際に説明したように (浜本 2011), すべてのムヒは——妖術関係のムハツソに限らず、他の施術に用いられるムヒもそうなのだが——たとえ親子の間であれ、兄弟間であれ、必ず現金で購入されねばならないとされている。現金の支払いをとまわないと、ムヒはその効力を発揮しないとされているのである。この一見奇妙な制約の意味、さらに唱えごとの中でわざわざ購入履歴を述べなければならないという奇妙さは、お気づきのよう、冒頭の決まり文句を「字義通り」にとりさえすれば容易に理解できるだろう。ムヒは「奴隷」であると言われるが、それはけっして施術師 (そして妖術使い) がムヒに対して行使する支配力の比喩などではない。それは文字通り、現金で購入された「奴隷」なのである。海岸部のアラブ・スワヒリ社会との交渉の長い歴史をもつミジケンダの人々にとって、現金による購入によって成立する絶対的従属関係である「奴隷」は、親子関係と並んで、絶対的従属関係のよく知られた二つの形態の一つであった。ここでは文字通り施術師は購入の事実をムハツソに対して証言している。現金による購入が施術師にムハツソに対する絶対的命令の権利を与えるのである。

唱えごとの次のセクションでは、施術師とムハツソのこの主従関係の宣言が繰り返され、ついでそれは親子関係における服従関係になぞらえられる。

次のセクションでは施術師は「私はフュラモヨの罫をかける (nahega fyulamoyo)」と宣言し、可能なフュラモヨの種類を列挙し、ムハツソに発動を命令する (「昼に夜に揺り動け」)。

唱えごとを中断しての患者との短い会話の後、再開された次のセクションでは、患者の状態が説明され、最後のセクションで、ムハツソに対して再び命令を下す。「彼女を放してやれ」と。

以上のムハツソに対する唱えごとには謎めいたところなど、どこにもない。それが謎めいて見えるとすれば、読むものが何か深い意味を隠した象徴的表現であるかのようにそれを扱ってしまうからである。しかし、この唱えごとにおけるすべての表現は、実は字義通りにとられるべきなのだ。

ムハツは実際に施術師の奴隷なのであり、だから施術師はそれに命令を下すことができる。そして唱えごとの決まり文句「捕まえろと言われれば、お前は捕まえろ。放せと言われればお前は放す。」が単刀直入に述べているように、ムハツはまさに施術師の命令に応じて正反対の行為を遂行することができるのである。妖術使いとはムハツに対して、誰それを捕らえよと命じて、罾を仕掛ける者である。施術師は同じムハツを使って罾を仕掛けなおし、同じ患者をその罾にかけなおして、彼女に作用するムハツに対して、今度は「放せ」と命令するのである。別の比喩を使って言うならば、ムハツはプログラム可能なエージェントである。施術師は、妖術使いが設定したプログラムを、自分のコマンドで上書きして、それを再度走らせるのである。

ムハツに対するこの唱えごとの後、施術師はこうしてプログラムされたムハツで地面に「罾」を描画し、その上を患者に往復させ、念入りに踏ませることによって、彼女をムハツの作用の下におく。そして三種の鶏を用いた施術の中心部分が遂行される。

鶏たち

明らかにクブエンドウラの主要部は、逆毛の鶏、白い鶏、黒い雌鶏の3種の鶏を用いた施術である。「罾」の上に座っている患者に対する、鶏の羽毛を塗りながらの周回、薬液の振り撒きと撫で回し、鶏の処置（最初の二羽については屠殺、最後の黒い雌鶏は蹴爪の切除）と類似した施術が繰り返される。それぞれのプロセスごとに唱えごとが伴う。しかしなかでも最初の逆毛の鶏に対する部分は、周回の回数の点だけではなく、唱えごとの詳細さ複雑さの点でも、突出している。

他の二羽の鶏とは異なり、逆毛の鶏は妖術使いがムハツを使って攻撃する際のキリャンゴナ（媒体）であり、クブエンドウラの施術師も、それを用いてムハツにコマンドを実行させるのである。逆毛の鶏に対する唱えごとでは、呼びかけの対象は鶏であるのか、ムハツであるのかが曖昧に交じり合っている。患者の陥っている状態が描写され、その後、鶏に対して、そしてムハツに対して、冒頭のムハツに対する唱えごとと同じ章句が繰り返される。「さて、今日、私はお前、逆毛の鶏に告げる。解き放て（ほどけ）と命じる。この子供を解き放て。」「フュラモヨよ、お前には父親はいない。私こそがお前の父親。お前には母親はいない。私こそがお前の母親。お前、奴隷よ、使役される者よ。捕まえろと言われればお前は捕らえる。放せと言われればお前は放す。今私は命じる。彼女を解き放て（ほどけ）。」

次いで、逆毛の鶏をまるで刷毛のように使用して、患者に薬液が散布され、塗りつけられる。薬液には同時に3つの効用が期待されている。「冷やす」こと、「汚れ」を戻すこと、そして「解き放ち」こと。しかし逆毛の鶏による散布・塗布の唱えごとの中で強調されているのはもっぱら「解き放ち」である。

クブエンドウラの施術でおそらくもっとも重要なこのパートは、冒頭の唱えごとの分析で確認した点を再確認させてくれる。施術師は、妖術師がしたのと同じやり方で（罾と同じキリャンゴナ——逆毛の鶏がその第一のものだ——を用いて）ムハツを患者に向わせ、ただし妖術使いが使用したコマンドとは正反対のコマンドで、それを上書きしてしまうのである。

白い鶏と黒い雌鶏については、それぞれが果たすべき役割は唱えごとの中でも明快に述べられている。白い鶏は「光明の鶏」であり、「照らし出すこと。道をよく見えるようにして、彼女に道を示すこと」がその役割である。その唱えごとの中では奪われた「汚れ」を戻すことと、「冷やす」ことが重点的にとりあげられている。最後の黒い雌鶏は「力の雌鶏」と呼ばれ、その仕事は「力を戻す」こと「豊饒性」を取り戻すことである。いずれの鶏についても唱えごとは短く、また簡単に済まされる。どの鶏も、どの施術の構成要素もクブエンドウラには不可欠である。どれが欠けても施術は成立しない。しかし、クブエンドウラの施術における焦点は、患者を妖術使いが用いた同じムハツソの「毘」にかけ、妖術使いが用いたまさに同じキリャンゴナを用いて、妖術使いの命令を上書きする別の命令を与える、この逆毛の鶏の場面である。すでに述べたように、治療に用いるムハツソと妖術に用いるムハツソが同じものであることは多くの人知っている。同じでなければならないのは、ほかでもない。治療行為は、実際には妖術使いが妖術をかける行為と寸分違わない行為だからだ。先の施術師が語っているように、その「目的」だけが違う。あるいはムハツソに実行させるコマンドだけがちがっているのである。

クブエンドウラの意味「ひっくり返す」とは、正反対のコマンドによって、ムハツソの作用をまさに反転させることを指していたのである。

治療施術の意味

クブエンドウラ施術の検討を通じて、ムハツソ——あるいはより一般にムヒ——のもつ一つの特長について明らかにできた。前稿（浜本 2011）で紹介したように、ムヒは屋敷の秩序の外部の存在（主としてブッシュの植物）に対して種々の処置——生のまま薬液を抽出、煮て取り出す蒸気や液、炭になるまで炒める——を加えることによって、さまざまな効果を発揮できるようにした「薬」である。通常の薬剤や毒、土着の民間薬などと異なり、それらは唱えごと（コマンド）によって作用する。ここでさらに明らかになったのは、それらが基本的にプログラム可能なエージェントであり、それによって正反対の結果すらもたらしうるものだという事実である。それは現金取引を通じてそれを「奴隷」として購入した者に、制御の権利を与える。妖術使いと施術師が行っているのは、まさに同じ作業である。ただ走らせるプログラムが正反対の方向を向いているだけである。

施術師が妖術使いの似姿であるというこの事実は、妖術についての人々の観念にとって大きな意味をもっている。上で引用した一人の施術師が言っているように、施術師は「妖術使いがどんなふうにことを行うかを模倣している」のだと言われる。しかしこれは実は奇妙な話なのだ。しつこいようだが——そしてこれは私の一貫したポジションなのだが——模倣の対象である妖術使いなどそもそも存在しない。誰かが不幸——たとえば上の施術の女性患者のように、周囲の人々から嫌われ、自分でも周囲の人々にうんざりし、長続きするパートナーに出会えないでいるといった不幸——に苦しめられているとき、それをムハツソを使って引き起こしているような人物などどこにも居はしない。妖術使いなるものは、人々が、そういう奴がいるに違いないと単に思い描いているだけの存在に過ぎないのである。おまけにこの想像された妖術使いが妖術をかけているところは、密かに人

に知られないように行われ、誰もけっして目撃できないのだとされている。真似しようにも何を真似すればよいというのだろう。妖術使いがやることを真似しているという施術師は、想像上の対象の行う想像された行為を模倣しているだけだということになる。しかしその結果、施術師が行う作業は目撃可能な現実の行為である。施術師は、自分たちは妖術使いの行為の真似をしているのだというが、実はそれは転倒しているのである。彼らの行為の方こそがまさに模倣されうる行為、妖術使いについての想像の現実的な根拠となっているのだ。

施術を受けている患者や関係者、つまりそれを目撃している人々は、その都度、妖術使いが妖術をかけるときにどんな風にそれをやっているのかを、まさに目の当たりにすることになる。きっと妖術使いたちも、こんなふうには罫を準備し、こんなふうにはムハッソに対してコマンドを走らせているのだ、と。施術師の行為こそが、単なる想像されただけの行為に現実的な存在可能性を与える。妖術使いと彼らの行為は、言わばよりリアルになる。

この合わせ鏡のような関係は、これだけにとどまらない。クブエンドウラがもし効果をあげ、彼女の状況がその後実際に好転したとするとどうだろう。それは施術師が使用したムハッソにそれだけの力があつたことの証明である。しかしそれは同時に、同じムハッソを使用する妖術使いの攻撃にも実効性がそなわっていることも意味する。施術に効果があるのであれば、当然妖術にも効果があるはずだということである。それは妖術の現実性と効果を証明してしまうのだ。

では、施術になんの効果もなかった場合には、ムハッソの効力そのものが疑わしくなるのだろうか。そんなことにはならない。施術は科学実験や、物理化学法則の適用ではない。それは施術師と妖術師が勝ち負けを競う勝負なのである。施術に効果がなかったとしても、それは敵の方が上手だった、施術師のムハッソに対する制御の力を妖術使いの方が上回っていたというだけの話である。施術師は結局、妖術使いのプログラムを彼の力では上書きできなかったのだ。野球ではピッチャーとの勝負で3割も勝てば強打者である。施術師も妖術使いとの戦いで五分の戦いができれば、十分強力な施術師だということになるかもしれない。失敗は織り込み済みのだ。そして施術の失敗は、むしろ逆に妖術使いと彼の術の力を人に実感させるのである。

かくして妖術使いの攻撃に対処するための実践であるクブエンドウラ治療は、皮肉なことに妖術攻撃の現実的可能性を補強してしまうのである。

註

- (1) 妖術の種類の一つに「汚れを奪う (kuwala nongo)」と呼ばれるものがある。これはムハッソを用いず、したがって特殊な知識抜きで誰にでも実行可能な妖術であり、致命的なものではないが厄介である。この妖術をかけるには、犠牲となるターゲットの身体の一部(髪の毛、体毛、爪)あるいは身に着けているもの、所有物などをこっそり盗み、それをムズカと呼ばれる洞窟などに置いてくればよい。「汚れ」を奪われたものは体調不良になるだけでなく、人々から相手にしてもらえない、商売がうまくいかないなどの状態に陥る。「悪い汚れ」がついたとも表現さ

妖術観念はどのようにしてリアリティを獲得するのか：抗妖術施術の分析を通じて

- れる。この状態を治療するには、ムズカに赴き、「汚れ」を取り戻してこななければならない。
- (2) この地方には「姓」の概念はなく、人名は、その人自身の名づけられた名前 (dzina ra kuhatsa) + wa (英語の“of”にあたる) + 父親の名、という形をとるのが一般的である。ここではツイククが患者本人の名前、サリムが彼女の父親の名前、ということになる。
- (3) 逆毛 (chidimu) は、「逆立つ」を意味する動詞 ku-dimuka から来ているが、何かが一気に散らばる様 (鳥の群れがいっせいに飛び立つような) を表す動詞 ku-didimuka とも連想がある。ンディムロ (ndimulo) は妖術の一種で、その名称はやはり動詞 ku-dimuka から来ている。これにかけられると人は怒りっぽくなると言われている。動物が怒りで毛を逆立てることとも関係していると思われる。怒りっぽくなることは、フュラモヨの引き起こす症状の一つでもある。ムバユカ (mbayuka) は人を発狂させる妖術の一種で、「発狂する」を意味する動詞 ku-ayuka (kpwayuka) から来ている。発狂もフュラモヨの症状の一つである。唱えごとのこのくだりは、妖術攻撃のキリヤンゴナ (chiryangona 施術に必要な品々、媒体) としての逆毛の鶏に言及している。
- (4) ドゥルマの屋敷 (mudzi) は人々にとって究極の共同性の単位、秩序の世界であり、そのイメージは、数世代にわたる一夫多妻婚家族の集合体であるが、夫婦と彼らが居住する一つの小屋がその出発点であるとされている。「屋敷をなさない (kotsohenda mudzi)」とは「夫婦で所帯を維持できない」という意味になる。
- (5) クブェンドゥラにおいては、フュラモヨを通常なら口に出してはならないような卑猥な言葉で「罵る (ku-hakana)」必要があるとされている。患者が、驚いている様子だったため、キメラはこれを説明して患者に詫びている。
- (6) 一連の言い回しは、よく知られている祈願の型にしたがっている。「彼女は回復することがどういうことかを知っている。彼女が回復しますように。」は yunamanya kuphola, naaphole. を訳したものであるが、やや説明過多かもしれない。単に「彼女が回復しますように」でも済む。

参考文献

- 浜本 満, 2001, 『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』, 弘文堂
- 浜本 満, 2011, 「薬の想像力：ケニア海岸地方ドゥルマの妖術とムハッソの観念」, 『九州大学大学院教育学研究紀要』第13号 (通巻 第55集) pp.95-131.

Imagined activities made real: how to treat witchcraft-illness

Mitsuru HAMAMOTO

The objective of this paper is describing and analyzing “*kuphendula*” (derived from a Duruma verb meaning ‘to turn around, to reverse, to turn upside down’) treatment, which aims to ‘cure’ illness and other misfortunes caused by witchcraft (*utsai*) among the Duruma of the Coast Province of Kenya.

Witches (*atsai* (pl. of *mutai*)) are thought to cause a wide range of misfortunes by means of special ‘medicines (*mihaso* (pl. of *muhaso*))’. In order to cure them, ‘doctors (*aganga* (pl. of *muganga*))’ use the very same medicine as witches use to cause harms. It is shown the medicines are ‘programmable agent,’ neither good nor evil in themselves, and both witches and doctors have control over them. In *kuphendula* doctors try to ‘overwrite’ the programs that his opponent set in. In so doing doctors are imitating what witches are believed to do when they bewitch their victims.

If witches are only imagined beings, with their bewitching activities being unobservable in principle, doctors are actually imitating the imaginary, thus making the imaginary the observable facts, i.e., reality. The practices based on, and caused by, the imagined existence and activities of witches, ironically turn the imaginary into the real.